

## 36 (私達の)「社会教育」とは何だったのか?だが、その本質は変わりようがない?!

堂本 彰夫

### (1) Kさんへの返信?!だが、これは、自らへの返信(現時点での内なる総括?)でもある!

別途書き綴っている「岳陽と共に」の記事(『新通信』第43号)の一つで、「年賀状哀歌?」という部分の最後に少しだけ触れたが、やはりそれだけでは、大変心残りでもあるので(Kさんに申し訳ない?)、ここでは、私なりの、ある意味精一杯の「心の返信」を試みてみたい!もちろん、それは、私の、それこそ全くの自己満足ではあるが、最近の、「社会教育」を巡る状況の受け止めと、一方で、それと連動した、私の、これまでの取り組みの回顧(反芻?否、反省?)を、近いうちに行わなければいけないと思っていたので、いい機会となった(それに便乗した?)ということでもある?!まさに、これは、自らへの返信、言い換えれば、現時点での内なる総括?ということでもある!

さて、改めて、まずは件の年賀状のことであるが、「通信」の記事では、「最後になるが、H県在住のKさん(88歳。わざわざそう書いてあった!)から、『お元気で過ごして下さいますようお祈りします。』『先生 私共が心血を注いで来た社会教育とは一体何だったのかの心境です。』という、手書きの文を添えた賀状メッセージを頂いた(正確には返信?)。実は、このKさんからのものが、ここでの書く動機となっているのであるが、人には、誰かに、最後に言いたいことがあるのである?本当に、Kさんにはお世話になった!Kさんは、教員出身の人である!」と書いている。そして、それが、私に、一つの総括としての「社会教育論?」を強いるものになったということである?!ただし、それに類するものは、これまでも、本コーナーにおいて何度も書いてきたつもりではある(そのように受け止められていなかったかもしれないが?否、そもそも、ほとんど読まれていない?)!

まあ、それはそれでよいのであるが、問題は、「私共が心血を注いで来た社会教育とは一体何だったのか?」という問いへの答えである!だが、それは、当然人によって千差万別であり、これで良かったのだという、言わば「肯定的評価」もないわけではない?!人々の学習意欲は高まり、多種多様な方途でもって、自らの学習を享受している人もいる!また、「社会教育」というような、小難しい?用語もなくなり、それこそ、人々は、楽しく、自由に、その恩恵を被っている?!さしずめ、人々は、「いつでも、どこでも、誰でも、そして何でも」学ぼうと思えば、それが出来るようになってきている!教養、健康、生き甲斐、仲間、そうしたものが、「生涯学習」という名の下に、活発に求められている!それでよいではないかということである?!

しかし、そうは言っても、そうした学習(「生涯学習」)を享受しているのは、まだまだ一部の人であり(お金と時間に余裕のある人達?)、学びたいのに学べない、学ぶ必要があるのに学ばない?そういう人達が、一方でおり、しかも、「社会教育」という名で、そうした人達への学習支援、あるいは地域づくり・仲間づくりへの働きかけを行ってきた「(社会教育)行政」は、徐々に予算人も減らされ、その直接の担当が教育委員会からなくなったり、あったとしても、ちぐはぐな位置づけ・名称替え(なかには、「生涯学習(振興/推進)課/係」と「社会教育課/係」を併存するところも出てきた!)が進み、挙句の果てには、その担当部署を、いわゆる「首長部局」に全面移行するところも出て来たりしているわけである(一般行政と教育行政の関係が、かなり怪しいものともなってきたということである?)!

### (2) 教育の「全体」と、それが指し示す「役割分担の構図」をいかに受け止めるかが鍵である!

ということで、いつの頃からか風向きが変わり、気がつけば、「社会教育〇〇」とか、「公民館」とかというものが、何か時代遅れの長物のような扱いとなり、社会教育という用語自体が、世間から、というより行政の方から無くなっていったわけであるが(併せて、「子ども会」や「青年会」あるいは「婦人会」や「PTA」といった、いわゆる地域に根差した、伝統的な「社会教育関係団体」の位置付けや存在意義が、その名称の変更等を伴って弱くもなってきた!)、一方で、そのような動きにも、一定のメリットや意義があるので(あくまでも現実的な?)、そのような評価には複雑なものがあるが、だからと言って、「社会教育」自体がなくなってしまっているわけではないのである(その証拠?に、それを規定している「教育基本法」も、「社会教育法」も、厳然と存在している!)。言うなれば、「社会教育のあり方」が変わってきたということである!

しかるに、そんな中、最近にわかに、「社会教育の再設計」とか、「公民館の再発明」とかというような言質が、当事者・関係者の間で登場してきているようである。それらの表記には、まさに、上記のような曖昧な関係、あるいは現場実践者達が苦悩している状態を何とか払拭したい!だから、新たな形にしなくてはならない!ただ、「再」であるので、まったく別のものでもない!要は、そこにある(見えなくなっている?)必要性(意義/善さ?)を再発見し、それらを再構築していこうという思いが込められている?!多少陳腐な言い方ではあるが、そこに、かの「イノベーション(革新)」の企図があるということでもある?!

もちろん、いずれにしても、それはそれで、真に望ましいことであり、賞賛に値するものとも言えるが、しかし、そこには、一つだけ確認しておかなければいけないことがある?!それは、一応長い間揺れ動き、自問自答(苦悶?)しながら、やはりそうしたものが必要だったのだという、半ば自省(回帰?)のようなものだけなのか?あるいは、同じ「社会教育」「公民館」という用語を使いながらも、これまでとは異なった位相のものを指向しようとしているのか?そこが、問われるということである!つまり、単なる「先祖返り」ではいけないということであるが、ただし、そこにある、ある意味普遍的な存在意義を、再び呼び戻そうということであれば、それはそれで、十分評価されるべきことであろう!

それは、どういうことかと言うと、端的には、それ(普遍的な存在意義)が、「学校教育のアンチまたはカウンター」あるいは「学校教育の(やむを得ない)補完」、少しニュアンスは違うが、「固定的な役割分担の一方」ということであってはいけないということである(特に前半の部分は、一部の関係者には強く意識された?本当の教育は、まさに社会教育の方にあるというようなスタンス?批判や忌避、そして意地もあった?心情的にはよく分かる?)!しかし、これからの社会教育を考えるに当たっては、そのようなスタンスや役割意識ではいけない(ちょっと言い過ぎか?)!あくまでも、教育全体の中での固有の役割と、それを踏まえた、他の分野との連携・協力のしぐみを、しっかりと地域の中に創り出していくことが求められるということである!

### **(3) 自分達(社会教育)が、何故「生涯学習(の推進/振興)」と名乗っているのか?そこが重要なのである!**

とは言え、そのこと自体は、かの「生涯教育(学習)論」に後押しされて、そのように振る舞い、他の関係分野にも多様に呼び掛けてきたわけであるが(「学社連携/融合」とか、「協働のまちづくり」とか)、何故か、それがうまくいかなかった(むしろ自身の存在が縮小される方向に動いた?)!だから、「新たな社会教育?」には、それが、何故そうなったのかの原因分析と、それを踏まえた、新たなヴィジョンと戦略が求められるということである(単なる「社会教育」という用語の復古的使用、それだけではうまくいかないということ!)!しかも、それは、繰り返すようだが、過去の失地回復や自己の存在意義を懐古的に主張することではない!

では、その新たな存在意義主張の方途であるが、多少冷静に言えば、「社会教育」という用語への回帰?よりは、ユネスコの用語の方が分かりやすいかもしれない?!それは、「ノンフォーマル教育」という呼称であるが(社会教育はこれに該当する!)、他の「フォーマル教育」(事実上学校教育を指す)と「インフォーマル教育」(家庭教育や、その他の私的教育)という関係でみた時、それらとの関係がトータルに把握できるということである(ここが重要である!)!ちなみに、その関係は、私なりに解釈すると、高度に制度化された教育(統一性/公助性)、中程度に制度化された教育(多様性/共助性)、ほとんど制度化されていない(否、してはいけない?)教育(任意性/自助性)ということである(ただ、これらは英語であるので、一般人にとっては難しい?しかも、「ノンフォーマル」自体は、当初は造語的であったので、馴染みも薄いかもしれない?!)!

要は、人間の集団(端的には、社会あるいは一つの国)には、この三種類(層)の教育形態が必要であり(これまでの経験上!)、その中で、教育の全体がうまく成就されるということであるが(それぞれの教育には、メリット(強み)/デメリット(弱み)、そして固有の役割があり、したがって、それらを総和的に実現させていくことが求められるということである!)、そのためには、言うまでもなく、それらを理解し、それぞれの立場、持ち場で、そのための動きとしくみづくりを行っていく「ヒト」が不可欠である!ただ、まがりなりにも学校教育と家庭教育には、それを遂行していく専門家(最終的な責務を負う人という意味である!現状ではかなり危ういが?)がいるが、社会教育(ノンフォーマル教育)の場合は、その性格上、多種多様な人々(関連施設や事業体を含む)が、それを担うわけである(親や教師も、一面それに該当するのではあるが!)!だが、残念ながら、そこにおける大多数の人達は、部分的な参加・参画をなすことはあっても、持続的/安定的に、しかも、それを「公共的な仕事」として全うすることは難しい!否、そうする義務もない(役職等の任期もある?)?

だから、少なくとも一定期間、それを「公共的な仕事」として担う人達(現今の「法人」等のスタッフ等)の存在状況と課題意識が、事態を大きく左右することは言うまでもない!そして、一方で、それを支援したり、一緒に事業を行ったりする行政(関連施設の職員を含む)の人達には、そうした人々の思いと動きを真摯に受け止め、その業務を果たしてもらう必要がある(それが「地位」と「給料」を保障されている人間の責務である!)。そこが、たとえ脆弱なしくみと予算ではあっても(これは「ノンフォーマル教育」の宿命?)、地域社会のあり様を俯瞰し、頑張っている人達の思い(情熱?)や情報を入手し、彼らとの連携・協力のスクラム体制を構築していくことが求められるということである(これがなければ話にならない?)!それは、「ひとづくりとまちづくりの循環」を創り出す、関係分野のネットワークづくりの「オーガナイザー」ということでもある!冒頭のKさんの言「私共が心血を注いで来た社会教育」とは、まさにそういうことであつたのかもしれない?!それで、今なお、そういうことが出来ていない(否、退潮している?)のであれば、いかにして、そのような連携・協力のスクラム体制を創り出すか(再設計/再発明)なのである?! (つづく)